明論『幻想録（ヴィジョン）』（1925）となって結実するということを示唆するだけにとどめて、この拙い講演の締めとさせていただきたいと思います。

ご清聴有難うございました。

［付記］

本講演は小著『英国の世紀末』（新書館、1999）所収の第3章「ケルトの薄明」の一部に依拠してなされたことをお断りします。

引用文献

1 W. B.Yeats, "Per Amica Silentia Lunae" in *Mythologies* (Macmillan, 1962) p. 334 より拙訳による。以下同じ。

2 Yeats, *Ibid*, pp. 333–334

3 Yeats, "The Trembling of the Veil" in *Autobiographies* (Macmillan, 1961) p. 130

4 Yeats, "The Tragic Generation" in *Autobiographies* pp. 286 –287

5 Yeats, "The Trembling of the Veil" pp. 136–137

6 John Stokes, *Oscar Wilde: Myths, Miracles, and Imitations* (Cambridge U.P., 1996) pp. 23–28

7 エリック・A・ハヴロック『プラトン序説』（村岡晋一訳、新書館、1997）p. 180

8 Yeats, "The Tragic Generation" p. 287

9 Yeats, "The Crucifixion of the Outcast" in *Mythologies* p. 156

第35回大会シンポジウム――オスカー・ワイルドの「批評」を批評する

オスカー・ワイルドにおける疎外論の不可能性と不可避性

――はかなさのアクチュアリティ

鈴 木 英 明

近代を規定するやり方にはいろいろあるが、これを疎外（alienation）という言葉で集約的に規定することは十分可能だろう。疎外という言葉も様々な語義を含むが、疎外とは一言でいえば、人間や世界が本来的な（authentic）あり方から隔たってしまったこと、人間と社会との生き生きとした有機的全体が壊れてしまったことであり、いわば「故郷喪失」の状態であるといえる。こうした近代の疎外状況に対する痛切な認識から文学を論じた代表的な著作として、ジェルジ・ルカーチの『小説の理論』（1920）がある。ルカーチはこの著作において、「内部と外部との裂け目」、「自己と世界との本質的差異」、「魂と行いとの不一致」といった言葉によって疎外を表すと同時に、「小説という文学形式は、そもそもの始めから故郷が失われていることの表現である。」と述べている。小説は疎外（故郷喪失）を表現する文学形式であるということだが、他方でルカーチは、小説においてこそこうした疎外を解消できると主張する。つまり、ルカーチによれば、小説は疎外を表現する形式であると同時に、疎外を解消、克服する文学形式でもあるということである。ルカーチによるこうした小説の規定は、そのまま近代に当てはまる。近代を規定する特徴には、疎外だけではなく、疎外の解消への欲望も同時に含まれているということである。

Paul de Man は、'The Dead-End of Formalist Criticism' と題されたエッセイにおいて、マルクス主義は詩的思考（poetic thought）またはパストラル的思考（pastoral thought）であると指摘している。詩的思考、パストラル的思考とは、本来的な世界からの人間の分離を乗り越え、有機的全体性を再構築しようとする思考、つまり疎外の解消を目指す思考である。そして、ヘルダーリンの詩の読解を通じて、

失われた存在、故郷の回復を目指すハイデガーの哲学も、この詩的思考の一ヴァージョンであるとド・マンは示唆している。以上のド・マンの議論から敷衍していえることは、20 世紀におけるマルクス主義による革命と、ハイデガーが関与したナチズム（国家社会主義）の運動はともに、疎外の解消、克服を目指すモダンな政治的プロジェクトだったということだ。夥しい血が流されたロシア革命とナチズムという疎外克服のプロジェクトが大失敗に終わったことから、21 世紀においては、いわば「ハードな」疎外論は死滅したかに見えるが、「ソフトな」疎外論は、リベラルなエコロジー運動などに姿を変えて生き延びているように思える。これから見るように、ヴィクトリア時代後期の唯美主義の主たる源が、近代市民社会の勃興期においてホイッグのリベラルであったシャフツベリにあるとすれば、世紀末の唯美主義にも、疎外の超克を目指すリベラリズムという世俗的政治理念が流れ込んでいるはずであり、そうした流れを意識しつつワイルドの唯美主義を再検討することは、今日においても疎外論的思考を引きずっている私たちの足元を見つめ直すことにつながるのではないだろうか。私にとって、「ワイルドの『批評』を批評する」とは、そうした系譜学（genealogy）を実践することに他ならない。

まずは、Linda Dowling の著書 *Vulgarization of Art*（1996）に依拠しながら、Anthony Ashley Cooper Shaftesbury（1671–1713）の道徳美学理論と政治との密接な絡み合いについて見ておきたい。シャフツベリの祖父、つまり初代シャフツベリ伯爵はホイッグの中心人物であり、哲学者ジョン・ロックのパトロンだった。シャフツベリはロックの教えを受けて育ったが、ホイッグ政権を理論的に正当化するにはロックの経験論は適当ではないと考えるようになる。ロックの経験論では、神から授けられた王権（divine right）とともに生得観念（innate ideas）も否定される。したがって、人間が善悪の判断を行う際の基準は、人間に生まれつき備わった善悪の観念ではなく、神による罰を恐れ、神から与えられるご褒美を欲する人間の感情であると経験的論に説明される。他方、当時のホイッグは、ライヴァルであるトーリーから次のように批判されていた。“divine right” を始めとする超越的価値を認めず、善悪の超越的根拠も否定するホイッグのいう “liberty” とは、何でも好き放題に行う放縦（libertinism）を隠す仮面にすぎない、と。ホイッグによる国家体制を正当化し、それを道徳的に根拠づけるためには、“liberalism” から “libertinism” を排除し、経験論的な感覚、印象と、超越的な価値とを和解させる必要があった。そこでシャフツベリが提示したのが、“sensus communis”（共通感覚）としての “moral-aesthetic sense”「道徳的美的感覚」（Dowling の用語）で

ある。人間は、美しいものを快く感じるのと同様に善きものを快く感じる。人間は、そうした万人に共有された感覚を基準にして善悪の判断を適切に行うことができる、というわけである。美的なものが、人間を、ひいては社会を善の方へ、正しい方向へと導くという考え方の伝統を、Linda Dowling は “Whig aesthetic tradition” と呼んでいる。ホイッグの国家体制を道徳的・美学的に根拠づけるシャフツベリの身振りは、のちにドイツ啓蒙主義、ドイツロマン派を経由してヴィクトリア時代のイギリスに逆輸入される美学の伝統の根本に政治的リベラリズムが存在していることをはっきりと示している。

しかし、Linda Dowling の指摘のなかでさらに重要なものは、“moral-aesthetic sense” によってリベラルで民主的な国家体制を根拠づけるシャフツベリの理論は始めから矛盾を抱えていた、ということである。シャフツベリ伯爵のいう「共通感覚」とは、王権神授説となじみ深い自らの貴族的センシビリティを人間性（humanity）全体に投影したものであり、現実には新興ブルジョワジーに共有されるものではなかったからだ。つまり、シャフツベリの美学すなわちリベラリズムは、貴族的リベラリズムであり、リベラル民主主義を肯定するかに見えながら、実際にはそれとは相容れないものであったのである。

こうした矛盾は、資本主義の拡大や相次ぐ選挙法改正などによって社会の民主化、大衆化が進んだヴィクトリア時代後期において一層顕在化することになる。この顕在化の一例を、Matthew Arnold（1822–1888）の *Culture and Anarchy*（1869）に見ておきたい。アーノルドは、*Culture and Anarchy* の序文において、この著書の狙いは、英国が現在抱えている困難を解決するものとして “culture”（文化、教養）を提唱することにある、と述べている。アーノルドのいう「現在の困難」とは、アーノルドを震え上がらせた 1866 年のハイド・パーク暴動に典型的に見られるような、階級対立の激化による “anarchy”、無秩序状態である。アーノルドの提唱する “culture” は、階級を超越し、すべての階級を包摂しつつ社会全体を発展させる装置といえる。アーノルドによれば、アナーキーへの傾向を押しとどめる権威（authority）は、貴族階級、中産階級、労働者階級のいずれにも見出せない。そうした権威の源は、“ordinary selves” ではなく “best selves” から構成される国家に見出すべきであり、そうした「最善の自己」は “culture” によってすべての階級において育まれる、そうアーノルドは主張する。しかし、”culture” によって階級横断的に育成されるはずの「最善の自己」から成る理想的な文化国家からは、明確な階級意識を持ち、民主主義の徹底を求める政治運動にかかわる労働者は、その労働者がいくら礼儀正しく教養豊かであったとしても、排除されるだろ

う。"culture" によってすべての階級において陶冶される「最善の自己」、こうした「最善の自己」が構成するリベラルな国家は、やはりエリートたちによって構成される一階級が支配する国家とならざるをえないのである。

これまで見てきた「感覚と超越的価値との和解」、「対立するものの調和、統一」は、ワイルドにおいても *De Profundis* に至るまで一貫して重要なテーマだった。たとえば、'The Critic as Artist' (1891) においてギルバートは、芸術的、批評的気質を満足させるのは形式 (form) と精神 (spirit) とのコレスポンダンスのみであると語っている。*De Profundis* においても、芸術家が追い求める真理とは、外面が内面を表現し、'soul' と 'body' が統一される状態であると主張されている。そして *The Picture of Dorian Gray* (1891) では、ヘンリー卿がドリアンに吹き込む新ヘドニズムにおいて、分裂した魂と身体とを統一し調和に導くことが説かれていた。一見したところ、ここから次の二つのことがいえるように思える。第一に、つねに移り変わること、一貫性を持たないことを称揚したワイルドにはめずらしく一貫したテーマである、「対立するものの調和、分裂したものの統一」というテーマは、これまで見てきた "Whig aesthetic tradition" の系譜上にあるということ。第二に、そうした伝統的テーマは、冒頭で引用したルカーチの言葉との類似性を見れば明らかなように、近代の疎外を克服しようとする思考、有機体論と軌を一にしているということである。しかし本当にそういえるだろうか。

結論からいえば、ワイルドのテクストには、"Whig aesthetic tradition" には収まりきらない何かが、疎外論から逸脱するような何かがある。たとえば、The Picture of Dorian Gray の物語世界では、分裂したものの統一が最終的には不可能であることが示されていた。ドリアンの汚れてゆく魂と若さを保つ美しい身体とは、最後まで分裂したままで、一致することはなかったのだから。こうした調和が不可能であること、つまり疎外を超克することの不可能性は、ワイルドの批評テクストからも読み取れる。一例として、"The Decay of Lying" における、ミメーシスに関する有名なテーゼを検討してみよう。

> [I]t is none the less true that *Life imitates Art far more than Art imitates life*. (Wilde 90; emphasis mine)

> All that I desire to point out is the general principle that *Life imitates Art far more than Art imitates Life*.... (Wilde 94; emphasis mine)

イタリックで強調した部分は、しばしば誤って「藝術が人生を模倣するのではなく、人生が藝術を模倣する。」と訳されて引用されるが、正確には、「藝術が人生を模倣するよりもはるかに多く人生は藝術を模倣する。」である。もしもヴィヴィアンが「藝術が人生を模倣するのではなく、人生が藝術を模倣する」といったとすれば、それは、藝術と人生の模倣関係、ヒエラルキーを逆転させただけであり、両者からなるスタティックな階層構造・枠組みそのものに変化はなく、藝術とそれを模倣する人生とが一つの安定した全体を構成していることに変わりはない。ところが、"Life imitates Art far more than Art imitates life." という場合には、藝術と人生が互いに模倣し合うことになり、両者のあいだにダイナミックな循環が生じる。しかも、人生が藝術を「はるかに多く far more than」模倣することにより、この循環に不均衡が導入される。この不均衡によって、藝術と人生とが模倣し合うダイナミックな循環の調和は乱れることになる。藝術が人生を模倣し、人生も藝術を模倣することによって、藝術と人生とのヒエラルキーは絶えず逆転し回転し続けることになるわけだが、藝術の方が「はるかに多く」模倣されるという不均衡のために、藝術は絶えずこの回転の外に逸脱し、それをまた人生が追いかけ模倣するということになる。したがってこの場合、藝術と人生は安定した有機的全体を構成することなく、両者が調和に至ることは不可能になるのである。以上のように、"The Decay of Lying" における特異なミメーシス論においても、有機的全体を構成することが不可能であること、つまり疎外克服の不可能性が示唆されていることがわかる。

しかし、さらに重要なのは、調和や統一に至ることが不可能であるとしても、ワイルドが調和や統一について繰り返し執拗に語っていることである。ワイルドは、調和や統一への欲望を抑えることができないようだ。つまり、ワイルドのテクストは、分裂を克服しようとする疎外論は不可能であると同時に、疎外論を回避することもできないということを示している、ということである。

最後に、ワイルドのこうした特異性を背景として、先ほど話題にしたシャフツベリやアーノルドの文化リベラリズム、すなわち、民主主義を肯定するかに見えながら実際はそれを否定するという矛盾を抱えた文化リベラリズムが、ワイルドとどのような関係にあるのかという点について述べておきたい。*The Picture of Dorian Gray* におけるヘンリー卿の台詞が典型的だが、ワイルドのテクストに大衆や大衆文化を蔑視する傾向があることは事実である。しかし他方で、ワイルドは、少数のエリートが大衆を支配するという社会の枠組みそのものを吹き飛ばしてしまうような、ある意味危険な藝術の力を信じていたように思える。シャフツ

ベリの道徳美学が、"liberalism" から "libertinism" を分離したのに対して、ワイルドの唯美主義は、"liberalism" と "libertinism" を一緒くたにして、芸術を一つのスキャンダルにしているかのようだ。シャフツベリやアーノルドら文化リベラルが露わにしているのは、民主主義を肯定するかに見えながら実際はその否定に陥ってしまうという矛盾である。これに対して、ワイルドのパラドクスが示唆しているのは、民主主義を侮蔑し否定しているかに見えながら、じつは、民主主義の徹底的な実現を阻んでいる社会そのものの変革を藝術によって実現しようとする文藝復興の不可能な夢である。ワイルドにおいて、近代における文藝復興は、不可能であるにもかかわらず、それを目指ささずにはいられないものだ。ここにおいても、不可能性と不可避性のパラドクスがあるわけだが、まさにこの不可能性と不可避性とのあいだの、あるかないかの隙間から、希望の光が差し込んでくるのではないだろうか。それは、一瞬きらめいたかと思うとすぐに消えてしまう、はかない光である。

ヴァルター・ベンヤミンは、彼が創刊しようとしていた雑誌『新しい天使』の予告で、ユダヤ教の教典であるタルムードの中にある伝説を紹介している。その伝説によれば、一瞬ごとに新たな天使たちが無数の群れとなって生み出され、神の前で賛歌を歌っては鎮まり、無の中に消え去っていくという。ベンヤミンは、これから自分が創刊する雑誌が持ちたいと思うアクチュアリティは、こうした天使のようにはかないものであり、それこそが真のアクチュアリティであると言っている。ワイルドのテクストから差し込んでくる希望の光も、こうした天使のようにはかないものだが、このはかなさこそが、ワイルドのアクチュアリティを示しているように思える。

Selected Bibliography

Arnold, Matthew. *Culture and Anarchy and Other writings*. Ed. Stefan Collini. Cambridge: Cambridge UP, 1993.

De Man, Paul. "The Dead-End of Formalist Criticism." *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism*. 2nd ed. Minneapolis: U of Minnesota P, 1983. 229–45.

Dowling, Linda. *The Vulgarization of Art: The Victorians and Aesthetic Democracy*. Charlottesville: UP of Virginia, 1996.

Guy, Josephine M. "'The Soul of Man under Socialism': A (Con)Textual History." *Wilde Writings: Contextual Conditions*. Ed. Joseph Bristow. Toronto: U of Toronto P, 2003. 59–85.

Lucács, Georg. *The Theory of the Novel: A Historico-philosophical Essay on the Form of Great Epic Literature*. Trans. Anna Bostock. Cambridge: MIT Press, 1971.『小説の理論』原田義人、佐々木基一訳、筑摩書房、1994年.

Shaftesbury, Anthony Ashley Cooper, third earl of. *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*. Ed. Lawrence E. Klein. Cambridge: Cambridge UP, 1999.

Tanaka, Yusuke. "The Premature Burial of Liberalism: Inadequate Fetishists in Oscar Wilde's *The Picture of Dorian Gray*." *Hitotsubashi Review of Arts and Sciences* 4 (2010): 243–65.

Wilde, Oscar. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Ed. Merlin Holland and Rupert Hart-Davis. New York: Henry Holt, 2000.

_____, *The Complete Works of Oscar Wilde*. Vol. 4. Ed. Josephine M. Guy. Oxford: Oxford UP, 2007.

_____, *The Picture of Dorian Gray*. Ed. Donald Lawler. New York: Norton, 1988.

河野真太郎「田舎者の英文学 ── レイモンド・ウィリアムズと都市文化」『英語青年』第151巻第12号(2006):718–721.

ベンヤミン、ヴァルター「雑誌『新しい天使』の予告」『ベンヤミン・コレクション4 批評の瞬間』浅井健二郎 編訳、筑摩書房、2007年. 12–24.